

# 多文化理解の出発点としての戦争体験

— 日米の太平洋戦跡調査から —

## Consideration of War Experiences as a Starting Point to Understanding Pluralism Culture

— Research on the Battlefield of the Pacific War between Japan and the USA —

次世代教育学部学級経営学科

荒井 魏

ARAI, Takashi

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード**：多文化理解の壁・歴史認識の違い、「自由の戦士」の聖地・パールハーバー、アメリカの原爆観とテニアン島、アジアの人々への説得力、未来のための過去の記憶

**Abstract** : Despite the Pacific War ending, over 60 years ago, each of the relevant countries' views about the history of the war continue to show differences. Such differences, particularly the views of the atomic-bomb attacks on Hiroshima and Nagasaki, have become barrier to understanding of Pluralism Culture.

Based on my research of the Pacific War Battlefield between Japan and USA, I discovered differences especially between Japanese and the people in USA or Asia with consideration into the cultural background. At Pearl Harbor strong assertions by Americans maintain that the Pacific War was a battle to defend liberty. At Tinian island, I also realized a representative view of the USA and the feeling of Asian peoples toward atomic-bomb. Through these findings I propose how we should consider a new historical perspective about the Pacific War which has persuasion for Americans and Asians on the ground that the past memory is very important for our future.

**Keywords** : A barrier to understanding of Pluralism Culture・Different views about the history of the Pacific war, Sacred place of the soldiers for liberty・Pearl Harbor, a representative view of the USA on atomic-bomb and Tinian island, Persuasion for Asian people, Importance of the Past memory for our Future

### はじめに

戦後60年に当たる2005年から太平洋戦争における戦跡の調査を続けている。これまでにハワイ、レイテ、ルソン、コレヒドール、硫黄島、沖縄、ガダルカナル、08年は11月にテニアン、サイパンを調査した。

戦跡をこの時期になって歩いているのは、二つの理由がある。一つには60年といえば還暦に当たる。人間の場合はいわば人生のひと巡りが終わって、新たな人生へという段階だ。それだけに、戦争体験とはそもそ

も何であったのか、という答えが60年というひと巡りを終えて、新しい観点から浮かび上がってきそうな思いがするからである。

もう一つは、戦争体験に関する歴史認識の問題だ。日本の歴史認識は戦後、中国、韓国などからしばしば厳しい批判にさらされてきた。アメリカ、フィリピンなどの東南アジアの国々からは、相対的にみれば批判は少なかったが、やはり日本との歴史認識の違いは歴然としている。しかし、これまた戦後60年を経てどのような歴史認識となっているのか、互いに変わったと

すれば、どのような理由からなのか。そういった観点から戦跡を探ってみたい、と考えたからである。

本論文は主に、後者の視点から論考を展開した。タイトルを「多文化理解の出発点としての戦争体験」としたのは、グローバル化した時代の未来の平和文化創造は、何よりも多文化理解・共存が人類にとっては必要である。しかし現実には、戦争体験の評価、つまり歴史認識の食い違いが今もって多文化理解の最初の大きな壁となっているように思えてならないからだ。

また各国、各民族の歴史認識の違いは、それぞれの国の文化背景を互いに理解しなければ克服できない面もある。その意味でも多文化理解の「出発点」と考えている。この「出発点」を意味あるものとするためには、まず歴史認識の「違い」を率直に受け入れ、客観評価すること。さらに「違い」の上に立って結び合わせられる共通の価値観がないか、模索することも重要な方向性と考え、本論文もそうした趣旨で論旨を展開した。

#### 日米の戦争観、原爆観の根強い相違

歴史認識の違いという意味では、教員となる以前のジャーナリストとしての時代から一貫してこだわり続けてきたことがある。日米の戦争観、それに象徴される原爆観の大きな食い違いである。きっかけは、新聞記者としての最初（1969年）の赴任地が被爆地、長崎であったからだ。原爆資料館などにおいて被爆のむごたらしい実情、後遺症の問題などを目の当たりにし「ノーモア、ヒロシマ、ナガサキ」の思いを深くした。

しかし一方で当時から割り切れないものを感じていた。「ノーモア、ヒロシマ、ナガサキ」に込めた被爆者たちの平和の願いがどこまで国際的に理解されているのか、という疑問だ。1974年の夏にアメリカ西海岸シアトルにあるワシントン州立大学の夏期講座に短期留学し、その間に長崎原爆を研究テーマとして日本人留学生、大学側の教員を相手に発表した。大学側の反応は冷ややかなものであった。また毎日新聞の全国面記事でアメリカ人の原爆意識を短期留学時の取材結果として発表した。そのために意見を聞いたアメリカ市民の大半が原爆投下を正当化する声であった。<sup>1)</sup>

そうしたアメリカ市民の戦争観、原爆観はその後も基本的には大きな変化を見せていない。よい例が、被爆・終戦50周年に当たる1995年のアメリカ国内における二つの記念行事をめぐる、日米間の摩擦、対立である。

一つは1994年11月に起きたアメリカ郵政公社による

「原爆記念切手」発行問題だ。95年9月2日の対日戦勝50周年記念日に発行する10枚セットの1枚に、原爆投下後のキノコ雲の図柄を用い、その図の下に「原爆が戦争終結を早めた」というアメリカ側の主張ともいべき説明文を付ける、との発表がなされたのである。

これに対し日本の被爆者は無神経である、と猛反発、日本政府も不快感を示し、結局クリントン大統領の働きかけもあって切手の図柄は別のものに変更された。

「原爆記念切手」に続いて日米の摩擦が表面化したのは、95年春、アメリカ・ワシントンのスミソニアン協会のアメリカ国立航空宇宙博物館で開催を予定されていた広島、長崎の原爆投下をテーマにした特別展が中止された事件である。

特別展の内容は、広島、長崎の被爆実態を示す資料とともに広島に原爆を投下したB29爆撃機の「エノラ・ゲイ」も復元して展示など、アメリカにおける原爆に関する歴史観を改めて問い直す内容を含んでいた。これに対して退役軍人を中心に、日本への原爆投下は正当であり、原爆被害だけを強調するな、という強い反発が高まる。

国立航空宇宙博物館のハーウィット館長は退役軍人のつるし上げを食い、94年9月22日、退役軍人団体の圧力もあり米国上院は「エノラ・ゲイは第二次世界大戦を慈悲深く終わらせるのに役立ち、日米両国民の命を救った。（中略）……自由のために命を捧げた人々の記憶を非難し、攻撃すべきではない」という決議を満場一致で採択。結局、アメリカ世論に押され、同博物館は95年1月30日に特別展の中止を決定した。<sup>2)</sup>

#### 最初にパールハーバーを訪れた背景

皮肉にも被爆50周年の年に浮上した日米の考え方の相違は、示唆的なことをかなり含んでいる。戦後50年も立ちながら、原爆をアメリカで語ることは、米国上院決議からうかがえるようにアメリカ人に対する精神的な「攻撃」と受け取られかねられないことである。また一方で日本側の原爆観、その上に立った平和運動がアメリカ市民にとって一般的には説得力をもっていないことを示しているようにも思われる。

特別展計画を前に93年春に来日した国立航空宇宙博物館のハーウィット館長は、広島平和祈念資料館を訪れた際に「文明というものは、人間が歴史から学ぶことができる時だけ生き延びます」と記帳ノートに記したという。<sup>3)</sup>

それだけに特別展を中止せざるをえなかったハー

ウィット館長の無念さが想像されるが、多文化理解、文明創造の出発点として戦争体験を考えることの重要性に関して改めて感じるところが多かった。

太平洋戦跡を調査するにあたって、最初にアメリカ・ハワイのパールハーバー（真珠湾）を選び、2005年6月に訪れたのは、こうした日米の戦後の歴史認識の差の“原点”として片方にヒロシマ、ナガサキがあるとすれば、対極にパールハーバーがあるからである。その意味でアメリカの歴史認識の現状はどうか探るのにもっともふさわしい地である、と考えたからだ。

パールハーバーは、よく知られるように1941年12月7日（日本では8日）、日本海軍の艦載機による大奇襲作戦が展開された日である。米国太平洋艦隊の精鋭であるアリゾナ、オクラホマ、カリフォルニア、ウエストバージニアなどの戦艦が撃沈され、湾外にいた航空母艦群は無傷だったものの、一日にして艦隊は壊滅状態となった。戦死者も一般市民を含め、2400人余に達している。

攻撃開始は、日本の最後通牒がアメリカ側に手渡される約1時間も前のことだった。最後通牒を受け取ったアメリカのハル長官は「50年の公生涯を通じてかくの如き歪曲と虚偽に充ちた文書をみたことがない」と、訪れた日本の野村大使らに語ったという。アメリカはこの日を日本による卑怯なだまし討ちの日と捕らえ、それまで厭戦気分もあったアメリカ市民の参戦意欲をかきたてる結果ともなった。<sup>4)</sup>

そうした歴史的経緯もあって、ある意味、広島、長崎が日本における戦争体験の象徴とすると、アメリカの太平洋戦争の代表的象徴は、何よりもパールハーバーと言えるであろう。そのため日本人が原爆の投下責任を問う時、アメリカ人の多くはパールハーバーの被害を口にする。かつて原爆詩人の一人、栗原貞子（1976）は詩『ヒロシマというとき』で、広島を語る時、パールハーバー、南京虐殺…の答えがまず帰ってくることで被爆者としての痛み、苦衷、問いかけを歌っている。

## 2隻の戦艦メモリアルが示すアメリカの歴史観

そのパールハーバーには2隻の戦艦のメモリアル（記念館）があった。一隻は日本軍による奇襲攻撃で爆発、炎上、沈没した戦艦アリゾナの1962年開館のメモリアルである。戦艦の内部には戦死者1177人のうち遺体を回収された75人以外の乗組員が今も眠っている。

もう一隻は戦艦ミズーリのメモリアルである。ミズーリは1944年に進水、太平洋戦争では硫黄島、沖縄

の上陸作戦に参加、朝鮮戦争にも出動し91年の湾岸戦争では最初のトマホークを発射したことでも知られる。しかし何よりも日本人に印象が深いのは45年9月2日、マッカーサー元帥ら連合軍側と重光葵全権ら日本政府代表との間で降伏文書の調印式が執り行われた戦艦であることであろう。

ミズーリがパールハーバーに係留され、メモリアルとして開館したのは戦後53年目の98年である。このミズーリ・メモリアルのかつての降伏文書の調印場所であった甲板に立つと、アメリカの太平洋戦争の歴史観が今も変わらず厳然としてあることを、自然に気づかされる。

何よりも二つの戦艦メモリアルを同湾内に配置し、歴史を語らせていることである。一つは太平洋戦争の「卑怯なだまし討ち」による始まりであり、そのためのアメリカ人の犠牲を象徴するアリゾナ。もう一つは奇襲攻撃による敗北から立ち上がり、最後のアメリカの勝利を象徴するミズーリ。両戦艦のメモリアル間の距離は500mほどとほどよく、ミズーリから北東側を望めばアリゾナ・メモリアル、アリゾナ・メモリアルから望めばミズーリ、と配置にも計算がうかがえる。

そこには太平洋戦争を「グッドウォー」、正義の戦いととらえるアメリカの歴史観そのものが披瀝されている。ミズーリ・メモリアル内部では太平洋戦争のビデオが放映中だった。最初に打ちのめされた善玉が最後に悪玉をやつける西部劇とどこか重なる感じのドキュメント構成、とやや単純な印象もあったが、そうした歴史観を裏打ちしているように感じられた。

ミズーリの降伏文書調印場所ではガイドが、その歴史的意義を説明していたが、説明を受けているアメリカ人観光客のグループの横で次のグループがすでに待っている、という状況であった。

## 記憶し続けるアメリカ

アリゾナ・メモリアルの施設は、二つに分かれている。一つは栈橋近くにある建物で、パールハーバーの奇襲攻撃の記録映像を上映する映画館と、奇襲攻撃に関連する書籍やみやげ物を売っているショップがある。もう一つは、水深の浅い湾内に沈んだ戦艦アリゾナの上に跨ぐようにして設計された白っぽい浮栈橋の構造物である。

2日にわたって同メモリアルを訪れた。最初の日には開館時刻の30分前に行ったが、すでに施設前の大広場を1000人以上の人が囲むようにして並び、さらに続々とバスによって観光客が運ばれてくるという盛況ぶり



であった。2回目の時は、午前11時半ごろに訪れたがずらりと人が並んでおり、入り口で入館予約カードを渡され、入場するまでの待ち時間は2時間半と職員に告げられた。

予約カードの裏には「EXPERIENCE YOUR AMERIKA」「REMEMBER PERRL HARBOR」という小見出しの下に、奇襲攻撃で亡くなった兵士らのうちの一人について、具体的な戦死経過が書かれている。周囲の人の予約カードを見ると、それぞれ別の兵士について記載されていた。

筆者のものは偶然にも「トラオ・ミギタ」という日系二世のハワイ防衛部隊の兵士のもので、週末休暇(12月7日は日曜)で自宅に帰っていたところ、軍務に復帰せよとの奇襲攻撃後のラジオ放送を聞いて部隊に戻る途中死んだという。たとえ一人でも、戦死者何人といったような抽象的なデータではなく、具体的な話だけにパールハーバーの記憶、歴史が身近なものとなって伝わってくる。長い待ち時間、こうした具体的なアピールによって、おそらく観光客は、メモリアル側が提示するアメリカの歴史観に、入場する前から共感するような心理的な準備をさせられているような思いもする。

館内に入ると最初にメモリアルの職員によるパールハーバーの歴史についての解説があり、映画が上映される。まず「なぜ、そんなに多くの人が殺されたのか」という英語による問いかけ調のナレーションがあり、いきなり大音響とともにアリゾナが爆発、炎上、沈没するシーンが映し出される。

その後、時計の針を戻し、映画には資源に目をつけた日本軍の中国、南方侵略、日独伊三国同盟を協定しドイツ首相のヒトラーと並んで大観衆に手を振る日本の外相、松岡洋右、さらに近衛文麿、東条英機といった戦争にかかわる人物、そうした経過を経ての奇襲攻撃のための日本海軍の艦載機の猛訓練ぶりなどが映し出される。

そして再びアリゾナの沈没シーン、奇襲攻撃後のルーズヴェルト大統領の議会演説、アメリカ国内の参戦での盛り上がり、それを象徴する当時の「リメンバー・パールハーバー…」の歌が流れ、最後のナレーションは「REMEMBER PERRLHARBOR. UNDERSTAND TRAGEDY, HONOUR AND MEMORY」(パールハーバーを忘れるな。その悲劇、栄誉、そして記憶を理解せよ)であった。

記録映画からは、日本のアジアにおける侵略・加害行為とパールハーバーの悲劇を重ね合わせた構成、主

張。さらに何よりも、パールハーバーを太平洋戦争の正義、正統性の主張の象徴として記憶し続けるというアメリカの姿勢がうかがえる。日本で大学生ら若い世代に質問すると、広島、長崎原爆の投下日はなんとか記憶していても、開戦の日を知っている者は非常に少ない。ここにも、かなり日米でギャップがありそうである。

### 自由を守るための戦いと強い主張

映画を見た後、観光客はアメリカ海軍の船で沖合の浮棧橋のメモリアル(記念廟)へ行く。廟の正面大理石の壁にはアリゾナ戦死者1177人の名前が刻まれている。海面から数メートルのところにアリゾナの沈んだ船体が見え、赤くさびた砲座などの一部は海面に顔を出している。船体からは今も黒い油が浮かび上がってくる。ロマンチストの多いアメリカ人たちはそれを「黒い涙」と呼ぶ。死んだ乗組員のために船が流す涙で、アリゾナの生き残りの乗組員の最後の一人が亡くなった時、最後の油も浮かび上がるだろう、とも言う。

アメリカ人観光客は親子連れが多く、体験を次世代に伝えたいとの思いが強く感じられた。若い恋人、友人同士も多い。陽気な国民性だが、笑みを見せる者は一人もおらず、厳粛なムードである。「ソー・ロング」(また来るね)と涙ぐみながら、花びらを一枚ずつちぎって海に投げ入れている3人組の少女もいた。

そういった光景を目の当たりにすると、パールハーバー、そしてアリゾナ・メモリアルがアメリカ人にとっていわば「聖地」なのだ、という実感がする。そして沈没した戦艦アリゾナの乗組員をはじめとして、パールハーバーの戦死者はいずれも太平洋戦争で自由な国を守ろうとして戦った「自由の戦士」として最初の犠牲者である、との位置づけがうかがえる。アメリカの太平洋戦争を正義の戦いとする主張は、一つには自由を守るためという大義名分をバックとしているが、その出発点もパールハーバーなのであろう。

パールハーバーの奇襲攻撃による戦死者と、その後の太平洋戦争における戦死者らが眠るハワイ・ホノルルの西郊外にある国立太平洋記念墓地でも、その思いを濃くした。ここにも1966年に開館した記念廟があり、月桂樹の枝を手にした高さ9メートルの巨大な女性像の下に浮彫の形で文字が刻まれていた。リンカーン大統領が南北戦争で息子を失った母親への励ましの手紙の言葉「心からの誇り。それは、自由の祭壇に貴い犠牲(息子)をささげたあなたのものです」である。

太平洋戦争を「自由のための戦い」とするアメリカ

の主張は多分にスローガンであり、戦争の内実は帝国主義戦争であるといった意見が日本でよく聞かれる。しかし、そういった言い方だけで切り捨てられる問題ではない。英国からの独立戦争を経て制定されたアメリカ合衆国憲法では「われわれ自身と子孫のために自由の恩恵を確保すべく、このアメリカ合衆国憲法を制定する」と前文に記されている。

いわば人類の近代化過程において生みだされた思想が具現化されたものである。たとえスローガンであってもその意味での普遍性を持ち、少なくともアメリカ国民の大多数には今もって支持されている価値観であることが、パールハーバーの戦跡からもうかがえた。当時の日本の太平洋戦争のスローガンが国家神道、皇国史観をバックにした八紘一宇、大東亜共栄圏であったことを考えれば、その時代における普遍性の差がわかりやすいのではないか。

前述した国立航空宇宙博物館の広島、長崎の原爆投下に関わる特別展について非難した米国上院決議「自由のために命を捧げた人々の記憶を非難し、攻撃すべきではない」との主張も、過敏な過剰反応として片付けるのは簡単である。しかし、自由なる国アメリカという伝統、それを愛する文化風土を一方で考えないと、日米の歴史認識の壁は容易には越えられないように思われた。

#### トルーマンの主張がテニアン島のモニュメントに

では、このようなアメリカの太平洋戦争観がどうして原爆投下の正当性主張と結びつくのであろうか。その答えを求め広島、長崎に原爆を投下したB29機が離陸した地であるマリアナ諸島のテニアン島を、08年11月に訪ねた。

テニアン島も、そこから目と鼻の距離にあるサイパン島も日本軍の玉砕の島として知られる。それだけではなく、いずれの島も多くの日本人移住者と家族が犠牲となった。1944年の夏のことである。太平洋戦争で多数の一般住民が巻き添えとなるのは、両島が皮切りだが、そのサイパン、テニアン、さらにグアム島のアメリカ軍によって整備された飛行場から多数のB29機が日本の各都市の無差別爆撃に飛び立ち、最後には広島、長崎の原爆投下、という一般住民の悲劇を招くことになる。

テニアン島には米巡洋艦インディアナポリス号によって原爆の部品が持ち込まれる。それを組立てた工場跡、離陸前に原爆が格納されたピット跡、B29機の駐機場跡、さらに原爆搭載機などB29機が離陸した滑

走路などが残されている。いずれもアメリカ国家史跡「北飛行場歴史地区」内にあり、ナショナルパーク・サービスが管理している。

組立工場跡は半ば草に埋もれ、広島、長崎の原爆格納ピット跡は別々にあり、第一ピット、第二ピットとされ、それぞれに変形ピラミッド型のガラス張りの覆いがされている。その各ピット前面にモニュメントがあるが、いずれも文言は事実を淡々と刻んだものであった。

B29機の駐機場跡は、周囲を囲むようにして日本を爆撃した部隊のモニュメントが幾つも建てられている。その中に広島、長崎に原爆を投下した第20航空軍第509混成群団のモニュメントが刻まれていた。北飛行場から広島に世界で最初の原爆「リトル・ボーイ」を落としたB29機エノラ・ゲイと二番目の原爆「ファット・マン」を長崎に投下したボックス・カーが離陸したという事実を記した後に、注目すべき文言があった。投下の軍事的使命が当時のトルーマン大統領から命じられたこと。そして何よりも原爆投下が日本の降伏決断を早めさせ、第二次世界大戦を終わらせ、日本と連合国側双方の無数のさらなる犠牲者を出すことを結果として防いだ、との記述である。

碑文の最後は、テニアンやマリアナ諸島の住民の協力により1998年10月にモニュメントが建てられたことへの感謝が述べられ、「平和が続きますように」との祈りの言葉で結ばれていた。

ここへうかがえる原爆投下の正当性主張は、原爆投下を命じたトルーマン大統領が戦後、事あるごとに語ってきた主張に通じる。その正当性主張は中国での南京虐殺、フィリピンにおけるアメリカ軍捕虜らに対するバターン死の行進など加害・非人道的行為、パールハーバーの奇襲攻撃、さらに当時の日本軍は犠牲を無視して戦争を続行しようとしていたが、原爆投下によって終戦となり、日米双方で多くの命が救われたというのである。その数字を双方で50万、とも語っている。<sup>65</sup>

#### 慰霊の場でのアジア系旅行者の反応

第509混成群団のモニュメントが建碑されたのが、退役した戦艦ミズーリがパールハーバーにメモリアルとして係留されたのと同じ1998年で、しかも前述した「原爆記念切手」発行問題と、アメリカ国立航空宇宙博物館の原爆投下の特別展問題がクローズアップされた被爆・終戦50周年の95年から3年後であることも注目される。さすがにパールハーバーの奇襲攻撃に対す

る報復的な意味合いは表に出していないが、その投下の正当性主張は日米の考え方の食い違いが表面化した後も、今もって基本的に変っていないことをモニュメントは語っている、と言ってよいであろう。

トルーマンの主張は日本の加害、非人道的な行為も根拠としているが、テニアン、サイパンでは別の側面から同問題を垣間見ることができる。日本軍玉砕の島であるとともにサイパンでは1万2千、テニアンでは約3500人の民間人が犠牲となった。その多くはサイパンのスーサイドクリフ、バンザイクリフ、テニアンのカロリナス岬（萬歳岬）などに追い詰められ、自殺を選んだ人たちである。

そのため自殺したゆかりの場所には、日本側が建てた慰霊碑が数多く建碑されている。ところが最近、この慰霊碑にいたずら書きをしたり、ガムを貼り付けて行くなどの事例が後を断たないのだ。日本人旅行者が減った半面、増えているサイパン、テニアンへのアジア系の旅行者によるもの、との指摘を現地住民から何度も聞いた。

サイパン、テニアン訪問は2度目だが、「反発」に近いこうした感情は一部にしても、日本人に比べ冷淡、無関心といった様子が両島の慰霊場所で、アジア系の旅行者にしばしば見られるのは事実である。記念写真を撮るのに夢中で、あくまでも観光地感覚である。

原爆観の問題でも、アメリカとはまた違う意味でアジア系の人たちとは食い違いがみられる。アメリカにおける原爆投下の特別展が中止された後、ワシントンDCのアメリカン大学で1995年夏に原爆資料展「平和な世界を築く——ヒロシマ・ナガサキを越えて」が開催された。

その際、基調講演した当時の広島市長、平岡敬氏は会場との質疑応答で中国の留学生から厳しい異議が出たこと、原爆資料展に対抗するようにアジア系の学生によって日本軍の残虐行為や戦争責任告発の写真展が同大学の学生寮において開催されていたことなどを、報告。こうした体験から平岡氏はアジアの戦争被害者に目を向けない広島の訴えは、アジアの人々に説得力がないといった見方を示している。<sup>6</sup>

サイパン、テニアンの戦跡や慰霊の場におけるアジア系の旅行者の反応の背景も、平岡氏の指摘する問題と位相を同じくしているように思えた。今回、テニアンを訪れた時より3カ月前の2008年8月、広島、長崎の原爆格納ピット跡のうち、長崎の原爆格納ピット跡にある変形ピラミッド型のガラス張りの覆いが、意図的に壊された事件があり地元住民を驚かせた。犯人は

わからないが、ヒロシマ、ナガサキの訴えが、ここでもストレートに説得力をもっていないことを象徴しているのかもしれない。

### 違いを超えた新しい価値観を

戦後63年を経過する中で、そろそろ歴史認識のアメリカ、アジア各国との食い違いを超えた新しい共通の価値観が求められていると思う。そのためには日本の歴史認識そのものも大きく変わることが求められている。一つには日本の戦争体験を加害、被害の両面から謙虚にきちんととらえ直した歴史観の構築。もう一つは、各国の歴史認識の文化的背景の理解を深めることの大切さである。

家族の絆を大事にする儒教の影響力の強かった中国、韓国の歴史認識、また自由の国という誇りを教育によって強く植え付けられているアメリカの歴史認識は、そうでなければ本当のところは理解できないのではないか。

かつて日本軍による多くの住民虐殺もあったフィリピンを訪れる日本人は、意外に対日感情がよい、といった感想をもって帰る人が結構多い。しかしマニラで働く日本人通訳に聞くと、フィリピン人の太平洋戦争の歴史観は「許す。しかし忘れない」という姿勢であるとのことだった。それもスペイン支配統治時代からカトリック教徒が大半であるフィリピン文化を理解しなければ、わからないことであろう。歴史認識の背景の文化理解の努力は、そうした意味で多文化理解の出発点と改めて思う。

テニアンには、チャロモ人と言われる住民が約3500人、住んでいる。住民の平均月収は5-6万円、とささやかだが豊かな海、山の幸に恵まれ、陽気でのんびりとした生活を送っている。そのテニアンのチャロモの高校を訪れ、日本語の学習ぶりを参観した。30数人の高校生に広島、長崎の原爆投下日について質問したところ、いずれも知っていた。

原爆投下と直接の関わりはないが、素朴なチャロモの人々には自分たちの島から離陸した飛行機が広島、長崎の悲劇を生んだことに心を痛めている人が多い。2005年夏から広島原爆の日、8月6日に合わせて島民による「平和祈念式典」が開催され、日本の被爆者が参加したこともあった。<sup>7</sup>

チャロモの高校生が原爆投下日を知っているのは、そうした自然な歴史教育、平和学習がなされているためだが、そこにも一つ、違いを超えた新しい価値観構築のヒントもあるようにうかがえた。



## 未来のために過去を決して忘れてはならない

太平洋戦争を長く、自由を守るための「聖戦」であったとの意識をもつアメリカ人。その意識下で、原爆はそこだけは酔えない一種の心理的な「汚点」のようなものであり、それが原爆を持ち出すこと自体を「攻撃」と受け止める、過剰とも思われる反応を時に生んでいるのではないかと考えている。

広島、長崎への原爆投下作戦の両方に参加し、長崎に原爆を投下したB29ボックス・カー号を操縦したチャールズ・W・スウィーニー空軍少将（退役時）は、原爆投下の特別展中止問題に関わる1995年5月11日のアメリカ合衆国上院・議員運営委員会の公聴会「スミソニアン協会・未来へ向けた管理ガイドライン」で、「この歴史を生きてきた一人としてお伝えしたいと思います。そしてその私は、トルーマン大統領の決断が、当時の状況によって正当化されるだけでなく、道義的に不可避な決断であり、他に選択の余地をゆるさなかったのだということを信じている者なのです」

と原爆投下の正当性についての強い意志表示をしている。その言葉の後に持ち出されたのは、相変わらず南京虐殺であり、パールハーバー、バターン死の行進、日本軍の徹底抗戦の意志などで、原爆投下の特別展については「あの展示会は、日本が犠牲者で——我々が邪悪な侵略者であるという、ありもしない話を記念しようとしたものです」とまで語っている。<sup>8</sup>

しかし、そのアメリカも少しずつ変わりつつある。ハワイ・パールハーバーのアリゾナ・メモリアルで働いていたリチャード・フィスクさんは奇襲攻撃で友人2人を失ったが「ここでは（訪れる人と）形式的な話ではなく、人間同士の話をしている」と語っていた。被爆60周年の夏の長崎の平和祈念式典では、アリゾナ・メモリアル館長名で献花の花輪が爆心地の原爆殉難者の霊にささげられたが、それまでの歴史を考えれば画期的なことであろう。60年余の歳月の経過により、戦争に直接関わった世代にとっても、戦争を知らない世代にとっても従来のそれぞれの歴史認識を超えた共通の価値観が求められ始めているような思いもする。

サイパン島北部のスーサイドクリフ、バンザイクリフにも近いところには日本住民とともに死んだ韓国人を悼む碑が「韓国平和記念塔」近くにあった。そこには韓国語と英文で次のように刻まれていた。

「厚く高い憎悪の壁を壊し、世界を一つの思いやりのある家にするのが、唯一の人類が幸せになる道である。未来のために過去を決して忘れてはならない」

原爆体験をもとに世界で二度と核の悲劇を起させない、という被爆者の普遍的な願い。それを現実に普遍的なものとするためにも、戦争体験を風化させず次世代に伝え、多文化理解を通し「世界を一つ」とすることが、環太平洋地域、そして地球全体の安全、平和な文化創造のために必要であること。そのための教育の重要性を改めて考えさせられている。

- 1) 記事資料・荒井魏著（1973）「核の時代に生きる被爆二十八年の夏」毎日新聞8月1日付け
- 2) 平岡敬著（1996）「希望のヒロシマ」岩波書店 pp.14
- 3) 平岡敬著（1996）「希望のヒロシマ」岩波書店 pp.8
- 4) 木坂順一郎（1989）「昭和の歴史7 太平洋戦争」小学館 pp.25
- 5) 記事資料・トルーマンの広島市議会議長あての手紙内容（1958）朝日新聞4月9日付け
- 6) 平岡敬著（1996）「希望のヒロシマ」岩波書店 pp.41-42
- 7) 記事資料・「現地の人たち心から追悼」（2005）長崎新聞8月15日付け
- 8) チャールズ・W・スウィーニー著・黒田剛訳（2000）「私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した」原書房 pp.300-316

## 参考文献

- 荒井魏著（2005-06）「戦跡巡礼」毎日新聞10月2日付け-9月24日付けまで毎日曜版連載
- チャールズ・W・スウィーニー著・黒田剛訳（2000）「私はヒロシマ、ナガサキに原爆を投下した」原書房
- 長崎市編纂（1977）「長崎原爆戦災誌第一巻総説編」長崎国際文化会館
- リチャードA.ウイスニースキー著（1977）「真珠湾とアリゾナ記念館」Pacific Basin Enterprises
- Don A.Farrell著（1992）「TINIAN」(テニアン) Micronesian Productions,CNMI
- EARL HINZ著（1995）「PACIFIC ISLAND BATTLEFIELDS OF WORLD WAR II: THEN AND NOW」The Bess Press, Inc

（平成20年11月28日受理）